

少年ヌールの成長物語

中野 理恵

タイトルを見て、「あ～あ、今どき“マザコン”ものとは」と思った。その要素はなきにしもあらずなのだが、見終わって〈少年の成長物語〉が強く印象に残ったので、紹介したい。

南フランスの古ぼけた公営住宅に暮らす4人兄弟。父親の姿は見えず、昏睡状態で寝込んだままの母親を兄弟で自宅介護している。長兄のアベルは寡黙で、つい手が先に出てしまう。二男ムーはお調子者だが、優しく思いやりのある青年、三男エディは、何かやましいことに関係しているのか、振る舞いがよそよそしい。そして、末っ子のヌールはまだ中学生。14歳の設定だが兄たちと年齢が離れているためか、もう少し幼い、小学校5、6年生ほどに見える。ふさふさとしている縮れ髪、あどけない瞳でじっと正面を見るときの、真っ直ぐな表情。一度見ただけで印象に残る。

ヌールの日課は、臥せっている母の部屋の前にスピーカーを置き、大好きだったオペラを聴かせることだった。「きっと聴いている」と。ある日、登校するとオペラの歌声が聞こえてくる。声の発していた教室をこっそり覗くと、あの世界的オペラ歌手のパヴァロッティの歌う姿が映っているではないか（話はそれるが、このカットは僅かなのだが、ずっと聴いていたかったほど見事な声であり、画面がきりっと引き締まるようだった）。音楽講師の女性サラに言われて、ヌールは寝たきりの母にいつも聴かせているアリア「人知れぬ涙」を歌う。それを聴いたサラは、ヌールの才能を見抜き、ヴェルディの「椿姫」の楽譜を渡し、教室に通ってくるように言う。

兄たちには「奉仕作業に行く」とウソをつき、教室に通い始めるとヌールの上達ぶりは目覚ましい。そんなある日、母親が救急車で病院に連れて



©2021 - Single Man Productions - Ad Vitam - JM Films

行かれてしまった。すぐに、兄弟は病院を急襲。母親を取り戻して、自宅介護を続けていると、伯父がやってきて、「入院せよ」と説得する。すったもんだの挙句、自宅介護を続けることに。そのようなゴタゴタが重なり、学校に行けない日々が続いたヌールを気遣って、サラが兄弟の暮らすアパートを訪れる。ヌールが戸惑いながらも寝たきりの母を紹介すると、サラは、歌を続けるように、と。すると、警官がアパートにやってきた。エディにドラッグ所持の疑惑がかり、隠してあるのではないかとピアノを壊し始めたのだ。「やめて」ととびかかったサラは警察に連行されてしまった。

翌日、サラの車を警察まで届けたアベルは、ヌール宛ての封筒を受け取るのだが、渡すのを忘れてしまった。アルバイトで忙しいヌールは歌のレッスンを受けられない。そして、遂に母親が亡くなってしまった。夏休みの終わるころになり、アベルから渡されたサラからの封筒に入っていたのは、サラの出演するオペラのチケットだった。ヌールがその舞台を見つめる眼差しは輝いていた。家族の問題を乗り越えて、自分の〈道〉を発見したヌールに拍手を送りたい。

《Cinema Information》

『母へ捧げる僕たちのアリア』

フランス映画(108分) / 監督: ヨアン・マンカ / 6月24日(金) よりシネスイッチ銀座ほか全国順次公開

なかのりえ: 映画プロデューサー、ディストリビューター。(株)パンドラ代表。『ハーヴェイ・ミルク』を第1回配給作品として、これまでに100本を超える映画を配給し、視覚障がい者のための副音声付商業劇場上映を日本で初めて実現。著書に『すきな映画を仕事にして』(現代書館, 2018)等。